コロナ禍と芸術～変容する芸術表現の場～

大阪芸術大学　舞台芸術学科　特任講師　河邉 こずえ

本研究は日本において取り組まれている地域再生プロジェクトと、芸術表現の場とを結びつけることを目的としている。本研究の狙いは、日本において深刻な問題となっている地方の過疎化、そして同じく日本において深刻化している芸術家の活動の場の減少、この二つの問題を解決することである。そして、現在行われている芸術プロジェクトを研究し、筆者の専門である舞踊を中心に、表現の場を仮定し調査、研究を行なってきた。

まず、初めに各地で行われている芸術祭について調査を行った。調査を行ったのは道後オンセンナート 2022、国際芸術祭あいち 2022、瀬戸内国際芸術祭 2022、越後妻有大地の芸術祭 2022、BIWAKO ビエンナーレ等、2022 年に開催された芸術祭を中心に考察を行った。時期の問題やコロナウィルス拡大時期の関係もあり、現地調査できた芸術祭は数カ所であり、そのほかは資料などで調査を行った。主に調査した点は、芸術作品の傾向や芸術作品のジャンル、作家の考察などを行った。調査から浮き彫りになったのは、本研究の中心として考えている「舞踊」と言うジャンルにおいて調査結果を見ると、作品数は約一割にも満たない結果となった。この結果は「舞踊」のみに留まらず、「演劇」、「音楽」など舞台芸術と呼ばれる芸術、とりわけ空間と時間を要する芸術においては、長期にわたる芸術祭には作品を出展し辛い環境にあることが見出された。例えば、観客の時間を特定しない空間としての芸術、「建築」、「彫刻」、「絵画」などは長期に渡る芸術祭においても、表現の方法、管理が行き届くため、大半がこのような時間を約束しない作品となっている。では反対に、今回の調査において見られた、舞踊作品のあり方に着目してく。一つ作品例を取り上げると、瀬戸内国際芸術祭 2022 パフォーミングアーツ・イベントの中に「Come and Go　ひびのこづえ×島地保武×小野龍一×OGIJIMA」HIBINO KODUE という作品上演が行われた。演出・振り付け家、音楽家、衣装作家によるセッション作品であり出演者（衣装を纏う舞踊主）は公募オーディションによって選ばれた人々。パフォーミングアーツと名付けられたイベントとして計 5 回公演を行っている。本作品から見られた特徴として、瀬戸内国際芸術祭とは別枠にイベントとして公演を打ち出している事が作品上演に際する効果を高める一つの要因として見出されている。これまで筆者は数々の芸術祭を考察してきたが、芸術祭の一部として、期間など分けず上演される舞台芸術作品を調査したが、長期間にわたる芸術祭においてある数時間、または数分の上演は、集客が非常に難しく、結果上演作品を見る人が極端に少なくなってしまうことが問題視されてきた。しかし今回のように時間を約束する作品は別のイベントとして打ち出すことにより、集客は見込まれる。またある一定の日時に人を集客する事ができるメリットを活かすこともできる、例えば前述したイベントは芸術祭開催日から日が浅い土日に開催されており、一定の日時に人を集結させることにより、芸術祭の盛り上がりを作ることができ、地域にて人と人とが集う大きな起点となる事が見られる。空間芸術のように長期に渡り展示が可能であり、人々が好きな時に観覧できる作品とは区別して、時間を約束する作品上演も行うことで、芸術祭の人の流れに効果をもたらすことが可能となる。人と人とを繋ぎ合わせる地域活性化の目的と考えると、舞台芸術のもたらす効果は非常に重要なものになると考えられる。

芸術祭に留まらず、地域と人々を結ぶ役割として舞踊を上演する機会を増やすことを目的とし、同時進行で、芸術祭以外の場に関する調査を行った。まず調査の中心となったのは表現の場である美術館における展示やインスタレーションの調査である。美術館における表現方法の調査は、現代の日本の芸術表現の傾向、また観る側の芸術鑑賞の傾向などを洞察することができた。まず近年大きく変化が見られたのは、作品展示を展示するという概念から解き放たれ、インスタレーションとして企画を行う事が増えた事である。つまりは展示空間を含めて作品とみなしていく。より観る側が作品に参加していくスタイルが増えている。絵画の展示であったとしても、展示方法に演出が加わる企画が多く見られた。舞台芸術そのものの上演方法も演出によって、より沢山の観客に観られる機会が持てるのではないかと、新たな可能性につながる調査結果となった。日本において、才能あふれる若手芸術家、とりわけ舞台表現者の活躍の場が少なく、海外に行かなければ仕事として成立しない状況にある。この問題の背景には、日本人の劇場離れも大きく関係していると考えられる。日本人は劇場に舞台作品を鑑賞しに行く習慣がないため、舞台を上演する際にチケットを捌ききれない現状もある。

舞台鑑賞者の減少はコロナウィルスの流行によりさらに加速している。今この状況を変えるために舞台作品は劇場以外の場において存在できるよう変容していかなければならない。

今回着目した「地域再生」と舞台芸術を結ぶ研究がさらに進み、実際作品表現の場が増えると、自ずと舞台作品は沢山の人の目に触れることになる。また過疎化した地域に人々を集める場にもなりうる。特にこれまで難しいとされてきた時間を要する芸術には、ある一定の日時に人を集わせることのできる可能性がある。この特色を生かし、地域再生や、芸術祭、新しい価値によるパフォーマンスイベントの企画を確立し、地域と芸術との相互効果を実現させることができると考えている。引き続き今回の調査を基に、実現可能なプランの打ち出しに取り組んでいく。